第12回　福岡・医者と患者を結ぶ“心の通訳”

「九州おんな気質」

「人を診ずに病気を診る」という、患者不在の医療現場が問題視されて久しい。そうした医師側のコミュニケーション能力の乏しさの改善に、「模擬患者」を活用した実践的な方法で取り組んできた九州初の市民グループが、NPOから新たに株式会社へと転身を果たし、医療ベンチャーとしての発展を見せつつある。薫陶塾（福岡市）、その代表・黒岩かをるさんを、今回特別に取り上げてみた。

医者のひと言が患者の心に傷

つい先日、朝日新聞の「声」欄を目にしてひどく憤ってしまった。それはアトピー性皮膚炎の1歳児を持つ親御さんの投稿だった。皮膚症状のひどさに診察に訪れた病院の医師から「ひどい顔だね。まるでごみ箱から拾ってきたみたい」と言われて笑われたのだと言う。治療の結果、少し症状が落ち着くと今度は「やっと人間らしい顔になってきたね」とのこと。記事の見出しには「傷つけぬ言葉プロは考えて」とあったが、たとえ医師に悪気はなくとも、患者側に対してあまりにも無神経すぎる。専門医であれば、アトピーを患う子の、皮膚を掻きむしるほどのかゆみも、そんなわが子を持つ親の心労にも理解があって当然ではないか。近頃よく取り沙汰されるドクハラ（ドクターハラスメント）の典型例だろうが、診察時の医師の言葉に不愉快さや不信感を覚え、そのまま治療から足が遠のいてしまった経験が私にもある。

こうした問題の原因は、医療者と患者とのコミュニケーション不全にあるとして、「模擬患者」を活用したコミュニケーション教育講座を全国の医大や医療機関で実践しているのが今回紹介する薫陶塾である。代表の黒岩かをるさんは福岡市出身の九州女性だということで、福岡市平尾にあるオフィスに彼女を訪ねた。

「模擬患者」を育てて派遣

現れたその人は黒いシックなスーツ姿で、いかにもエキスパートらしい。専門的な話ばかりになるのでは…と、いささか身構えたところ、「私たちがやっていることは、むしろ演劇です」との言葉。見ればこちらの緊張を解こうとするかのような、茶目っ気を含んだ柔らかな瞳があった。やさしい語り口のままその活動について伺った。

薫陶塾の活動は「模擬患者」（SP）を養成

第12回　福岡・医者と患者を結ぶ“心の通訳”

黒岩 かをるさん

し、それを各医療機関に派遣して、医師や医大生の患者へのコミュニケーションの在り方を知ってもらう。まず模擬患者とは、簡単に言うなら、患者役をつとめるプロ役者である。学習会では実際の患者と同じに、あらゆる年齢・症状・職業・家庭環境・性格をあてがわれると、その患者になりきってしまうのだ。これに本番さながらに医療面接（問診）や処置を行うのは、まだ若い医大生や研修医たち。模擬患者と会話を進めるうちに、次第に自分の会話能力の未熟さに気づかされてゆく医師の卵たち。「つい難しい専門用語で説明してしまった」「何より患者への配慮の乏しさがあった」と、真剣に反省点を議論する彼らに黒岩さんも熱い期待を寄せる。

そもそもこうしたシステムは、60年代にアメリカで盛んになり、日本にも紹介されながら、現場の医師たちに重視されないままだったという。黒岩さんが薫陶塾の前身となる「福岡ＳＰ（模擬患者）研究会」を立ち上げたのは99年のこと。「医師の倫理」が様々に取り沙汰されるようになった時代にも、まだまったくの草分けだったという。

闘病生活で得た人生の針路

黒岩さんは１９４８年福岡市に生まれる。県立修猷館高校を経て津田塾大英文科に進学。卒業後は民間企業に就職し人材育成関連の業務にたずさわる。だがそんなある日、突然に不治の病に冒されてしまう。ベーチェット病だった。93年に勤めも退職し、長い闘病生活を強いられることになる。

「私の住まいは今も完全なバリアフリーです」と、朗らかに語る黒岩さん。それでも一時は敷居のわずかな段差をまたぐにも激痛が走るほどだったと言う。

そんな中で、一人の医師との出会いによりやく希望が得られた。病が快方に向かったのもそれからだった。その後は社会復帰へのリハビリに、心理学……、関連する分野を一通り学びわたった。だが何か満たされぬものを感じていたある日、知人の医師からの勧めで九大の講座で模擬患者をつとめたのが97年のこと。この時の経験は彼女の心を大きく揺さぶり、人生をハッキリと方向付けるものとなった。

「これだ！と思えるものが初めて見つかった」と、その時の感激に今も目を輝かせる黒岩さん。99年４月には同志５人と模擬患者の研究会「福岡ＳＰ（模擬患者）研究会」を発足。以後長崎大など九州各地の大学で非常勤講師もつとめながら、さらに社会福祉士・産業カウンセラー等の資格も取得。重ねて九大

「九州おんな気質」

大学院医学研究院の講座で医療経営・管理学も学んだというから、どれだけの打ち込みようだったかうかがえよう。研究会は01年にはNPO（特定非営利活動法人）の認可を受けて「医療コミュニケーション薫陶塾」が誕生する。

薫陶塾というネーミングからは、何か東洋的な精神道場もイメージされるが、黒岩さんによると「薫陶」とは、もともと陶土をこね上げる際に、お香のかぐわしい匂いを練りこむことに由来するという。それは彼女が人を育てる理想のあり方として長年求めてきた境地でもあった。「薫」という字の訓読みが「かおる」と、彼女の名と同じであることからも「いつか『薫陶』という言葉を看板にふさわしい活動を」という願い続けてきたという黒岩さん。

説明する黒岩さん

だがNPOの制度下では活動規制が多く、運営のための資金繰りも難しい現実があった。模擬患者の派遣にしてもボランティア要素が強くなり、病院側からも「わざわざ無償のボランティアで来てもらうのは申し訳ない」と受け入れを遠慮されてしまう。そこで昨年12月思い切って株式会社に転換を果たした。資本金も黒岩さん自身でねん出し、自らが代表取締役に就任。NPOが株式会社へ転換する例は全国的に珍しいそうだが、そこには彼女の、模擬患者の派遣をビジネス化することで、メンバーにもより強いプロ意識を促し、育てようという算段がある。NPOの頃から手塩にかけて育ててきた模擬患者たちも、研修を重ねて大きく育ってきた。なかに

模擬患者の研修風景

全国に広がる活動範囲

その後、医療現場でも模擬患者を用いての研修の必要性が大きく認識されるようになってゆく。あわせて薫陶塾の活動機会も全国に広がり、講座開催の実績も250例以上を上げるまでになる。

第12回　福岡・医者と患者を結ぶ“心の通訳”

「九州おんな気質」

模擬患者が医学生に相談

は劇団に10年間所属した後、医師となって現在はホスピス医をつとめる女性もいる。プロの演技者としても頼もしい彼女は、医師役・患者役それぞれ大奮闘しながら、双方に通じたアドバイスも与えてくれる貴重な存在だという。そうした優れた模擬患者たちを、薫陶塾の独自ブランド商品として医療現場に提供すること、それが黒岩さんの目指すビジネスの形だ。医師も模擬患者も互いにプロ同士となれば、より研さんを重ねることが出来て、医療サービスの向上を得られるのではないか、と黒岩さんは考える。医師であれ、いつ患者になるとも限らないのだ。実際にベテラン医師が、ある日自分が倒れてベッドで身動きできなくなって初めて、同僚医師たち患者への言葉のむごさに気づいたという体験談もある。

医療担う若者の育成に情熱

「模擬患者は何度もやり直しの効くサンプル。積極的に研修に取り入れて、患者との会話の訓練を積んで欲しい」。そのためにも、「質の高い模擬患者の養成」を彼女は使命とする。

薫陶塾を発足以来「次の世代を育む志」を理念に掲げ、次世代の医療を担う若者たちの育成に情熱を注ぎ続ける彼女は、学生たちによる自主講座の企画にも支援を惜しまずにきた。02年には医学生たち十数名を、模擬患者活用の最先端であるイリノイ大学シカゴ校CPCへの研修に伴ったという。将来、若者たちから「医学生の母」と慕われることが彼女の夢という。

塾のオフィスの窓からは、平尾山荘あたりが一望できる。そこは幕末に「勤皇志士の母」として慕われた野村望東尼の閑居だった。同じ時代に、少し離れた薬院あたりには「人参畑の女傑」と呼ばれた高場亂の私塾があり、やはり血気盛んな若者たちが集っていたことが思い出され、その面影が目の前の黒岩さんにオーバーラップされてきた。そうした旧福岡藩の女流の気風を、黒岩さんも受け継ぐところがあるのだろうか。

思えば医師と患者の関係も、まずは人間同士のものに他ならない。よりよいコミュニケーションのあり方を目指すのは当然であることに、わが国の医療界もようやく気づき始めたと言えようか。その手段も、言葉に頼った会話だけでなく、患者の状態に合わせた様々な形が模索されていくだろう。薫陶塾の示すパイオニア的役割は、今後ますます重要なものになってゆくと思われる。その活動が医療界だけでなく、コミュニケーションの疎通に大きくゆがんだ現代社会にも、一石を投じるものと是非なってほしい。

（葛木　操）